

都小 研小 会報

・発行所
・東京都小学校社会科研究会
・東京都新宿区四谷2-6
・発行人 石井正広
・編集人 西谷秀幸

島根大会の成果を生かす

東京都小学校社会科研究会会長
新宿区立四谷小学校校長

石井正広



令和六年十月三十一日(木)、十一月一日(金)に、第六十二回全小社研研究大会・島根大会が開催されました。

研究主題「地域に学び、未来を共に拓く生き方を問い続ける社会科学習」互いに関わりながら、主体的に考え、追究する力の育成を目指して～」を掲げ、第一日の全体会での基調提案及び第二日の会場校での研究発表と授業公開・学年別授業研究会を通して、その研究成果を力強く発表していました。

第一日目の全体会は、出雲市民会館で行われました。昭和五十四年の島根大会の大会主題「人間を大切にすると社会科学習の再構成」を掲げて取り組んだ

基本的な考え方を継承し、「社会をつくり社会を動かす人間との出会いの中で、子どもたちが『人間と社会』を理解していく」という考え方は社会科学習の基本であり、決して変わらな

いものがある。という信念に基づいた研究の取組が発表されました。

研究内容の骨格をなすものは二点でだと理解できます。一つは、「地域にある社会的

事象の教材化」です。平成十七年から県内全小中学校で行われている「ふるさと教育」との相互関係の中で、それぞれの活動が両輪となって行われていることは特筆されることです。それが、子どもの追究意欲につながっていたと考えます。

もう一つは、「知識と問いの構造図」の作成です。次の四事項を単元展開の中で構造的に描き出そうとしています。

- ①本時で獲得させたい知識
- ②学習活動と子どもに働かせたい見方・考え方
- ③本時の問い

④資料

この「知識と問いの構造図」は、単元指導計画の代わりになるものです。これにより、公開された授業は、本時の問いがねらいと整合化され、本時のまとめの知識がより確実性の高いものになっていました。

基調提案に対する指導・講評では、文部科学省教科調査官小倉勝登先生から、「学習指導要領実施状況調査」の速報に基づいて、学習指導要領改訂後の社会の実践課題の傾向についてご紹介いただき、島根県の研究成果と関連付けて授業改善の取組を価値付けていただきました。記念講演は、講師の万九千神社宮司・出雲市文化財保護審議会委員である錦田剛志様から、「神在月の国 出雲」日本中の八百万の神はなぜこの地に集まられるのか?という主題で、諸説をご紹介いただくことを通して、神話の世界と現在の私たちの生活を往還させながら、参加者を飽きさせることなく、最後まで楽しくお話いただき、たいへん勉強になりました。

二日目の会場別研究会は、出雲市内の三会場で行われました。第一会場：荘原小学校 第二会場：西野小学校 第三会場：中部小学校 それぞれの会場において、各学年二本の授業公開と学年別授業研究会が行われました。

また、学年別課題研究会は、三会場で合計して、島根県十三本、他地区十一本が提案され、それぞれ熱心に協議が展開されました。各会場の様子については二ページ以降をご覧ください

島根大会報告

全国小学校社会科研究協議会事務局長
港区立筈小学校校長

矢部洋一

第六十二回全小社研島根大会は、十月三十一日(木)、十一月一日(金)に「地域に学び、未来を共に拓く生き方を問い続ける社会科学習」互いに関わりながら、主体的に考え、追究する力の育成を目指して～」を主題として出雲市で開催されました。

第一日目の全体会は、出雲市民会館で、二日目の会場別研究会は、出雲市立荘原小学校、西野小学校、中部小学校の三会場で行われました。

全体会の基調提案では、「子どもは、社会に生きる一人の人間であり、生活者である。」として、子どもが社会の問題や課題を自分の事としてとらえ、追究することで社会に働きかけたり生き方を考えたりする子の姿を目指したことで、また、その手立てとして「知識と問いの構造図」を作成し、「教材の開発」、「学習過程と問い」、「学習が充実するための支援」の三つの柱で研究を進めてきたことについて実践事例を基に提案されました。

文部科学省教科調査官、小倉勝登先生からは、「令和四年度学習指導要領実施状況調査」の結果から、いくつか課題を挙げ、その改善点が島根大会の緻密な

授業づくりに盛り込まれていると、評価していただきました。

記念講演では、万九千神社宮司、出雲市文化財保護審議会委員である錦田剛志様より、「神在月」と言われる旧暦の十月に日本中の八百万神はなぜこの出雲の地に参集されるかについて、ユーモアを交えながら、諸説をご紹介いただきました。神々に人間的な側面があることを知り、なぜかほっとしました。

二日目の会場別研究会では、三会場で大会主題を受けた授業が展開されました。三会場は、同市内ではありますが、地域教材を各校で開発され、ミニトマトの生産、新川の開削、羽根盆踊り、直江一色飾り、水害、パソコン工場などを取り上げた授業が提案され、子どもたちが興味をもって学習に取り組む姿や活発な意見を交わす様子が印象に残りました。また、授業後の学年別授業研究会、学年別課題研究会においても貴重な実践提案と熱心な協議が行われました。

開催にあたり、島根県、出雲市各教育委員会、県内の先生方とOBの皆様には、授業研究はもとより、準備やきめ細かな対応に心より感謝申し上げます。

特集

全小社研・島根大会に学ぶ

第一会場

出雲市立庄原小学校

一 はじめに

庄原小学校は校地内に神庭岩船山古墳を有し、学区には荒神谷遺跡があり歴史が感じることのできる地域の学校である。

出雲平野での農業、店舗や工場など豊かな「ひと・もの・こと」を生かした教育活動に取り組み、子供たちの学習の様子からも地域への愛情が感じられた。

二 公開授業

授業は三、六学年の全学級で公開された。第三学年では、地域の農家のミニトマトづくりを教材化していた。まためる段階では、学んできたことからPR文を考え、地域の人に伝えようとしていた。第四学年では、地域の年中行事である羽根盆踊りを教材化していた。調べる・考える段階では、盆踊りの継承にかかわるコミュニケーションセンターの活動をGTに話を聞くなどしながら学習していた。まためる段階では、地域の課題や願いと関連付けて、自分にできることを考えていた。第五学年では、自動車をつくる工業の小単元で、

る。

【研究の視点2】「主体的・対話的な授業づくりの工夫」では、問いと資料を工夫する。資料の目的を吟味し、意図的に位置付ける。一人一人が課題や問い、資料を選択できる場面を設定する。対話的な学びのためには、子どもが調べたことや考えたことを「共有する」場面や「立場を意識した」話合いの場面を設定する。

【研究の視点3】「深い学びの授業づくりの工夫」では、まじめに向かう「焦点化された問い」を設定し、理由や願いを考えたり、特色を考えたり、自分自身のかかわり方を考えたりする学習活動を行う。指導と評価の工夫として支援を要する子どもへくる子どもとの育成し(主体的・たい(対話的)・もん(問題解決的)で追究する社会科の授業づくり)とし、研究の視点として三点が挙げられた。

三 全体会

(一) 基調提案

研究主題を「ふるさとに学び今を問い続け」ともに明日をつくる子どもへの育成し(主体的・たい(対話的)・もん(問題解決的)で追究する社会科の授業づくり)とし、研究の視点として三点が挙げられた。

【研究の視点1】「実社会に目を向ける教材の工夫」では、社会を支える人の思い、願い、努力、工夫が感じられるものや社会の仕組みがわかるもの、社会に潜む問題が見えるものを教材化する。それを知識と問いの構造図に整理して、単元構想を練

動が大切で、見通しと振り返りの中で子どもが自問自答できるようにしていく。

【対話的な学びのために】

みんな「共有する」場面を考える。発言者を一人ぼっちにしないこと、話をしていない子供以外の人の反応が大切である。立場を意識した対話的な学び「AとB、どちらを優先させるか」を理由を考えながら話し合う活動が考えられる。

【深い学びのために】

まじめに向かうための問い。学習してきたことを整理して、見方・考え方を働かせながら、社会科で活用できる概念を言葉として使えるように鍛えていく必要がある。

学習評価から授業を見直す。努力を要すると判断した場合にどのような手立てを講じるかを例示すること、十分満足する状況をどのような視点で見出すかを想定した授業づくりをしていくことが重要である。

(三) 指導講評

大妻女子大学教授、澤井陽介先生から指導講評があった。

【主体的な学びのために】

問いと資料で授業を考える。「問い」が重要であり、教科書の本文と資料から問いを考える方法の紹介があった。

一人一人が選択する場面を設定する。「選ぶ」「決める」「自力でやってみる」という学習活

第二会場

出雲市立西野小学校

一 はじめに

西野小学校は、三校の統合により誕生した五十四年の歴史をもつ学校である。校区の大部分は、斐伊川の沖積作用にて形成された肥沃な平野で、米を中心とした穀倉地帯となっている。また、近年は大規模な工場建設や住宅団地の造成が進み、人口が増加して活気に溢れている。

二 公開授業

三年生から六年生まで、各学年二学級で授業が公開された。

「焦点化する問い」を、三年

「地域を守る消防団」では、消防士が消防署に在るのに、なぜ消防団はそれぞれの地域に必要なのだろうか」とし、消防団の話も聞きながら考えを深めていた。四年「新川の開削」では、「当時の人々は何のために新川をつくり、一〇〇年後わざわざ閉じたのだろうか」とし、五年「これからの工業生産とわたしたち」では、「なぜ何度も話し合いをして、新しい素材で製品を作ろうとしたのだろうか」として、社会的な意味に迫った。

六年「明治の国づくりを進め

校長 神尾 健彦

た人々」では、「都会は発展しているけど、島根県はどうだったのか」という児童の振り返りから「明治政府の国づくりによって、地方(島根県)はどのように変わったのだろうか」という問いを設定し、自作資料をもとに調べた。そして、「焦点化する問い」を「なんのために島根県にも明治政府の改革が取り入れられたのだろうか」とし、明治政府が日本全国に渡って強い国づくりを目指していたことを追究した。「教材開発は大変だが、資料を変えれば、島根県以外でも実施可能であり、他県の学校でも汎用的に実践できる学習である」との指導助言があった。

三 全体会

(一) 基調提案

研究主題を「地域に学び、自ら問い続け、よりよい社会を考える子どもの育成」とし、問いと知識を明確にした学習過程の在り方」とし、社会事象に関心をもち、追究・検証しながら、自ら課題解決をしていく力を育てることを目標に研究を推進している。また、子供の思考の流れを大切に、我が事として考えられる授業の実現のため、三点に力を入れて実践してきた。

①本教材に関わる子どもの実態
②子どもの思考と学習問題をつなぐ単元づくり
③課題解決に向け、自ら問い続ける授業づくり

(二) 指導講評

島根大学の加藤寿朗教授より指導講評があった。

①問い続ける子どもの育成

問いは学習児童のスイッチであり、追究の原動力である。問い続けることが、問題解決的な学習の充実につながる。社会科で大切にしたい三つの問いは、「社会を知るための問い」「社会を分けるための問い」「社会に関わるための問い」である。

②知識と問いを明確にした授業づくり

「知識と問いを明確にした授業」とは、教師の仕掛けによって、「教師が学ばせたいこと」を「子どもが学びたいこと」にしている授業である。西野小の取組は、社会的事象との出会いとして、子どもが自分の経験とのズレ(矛盾・対立・葛藤)を認識する場面があり、焦点化する問いを通して、様々な他者との対話していた。

③魅力ある教材の開発

地域の事例から、日本の産業

等の一般的な特色を学ぶことができ、地域社会の一員として願いを実現するために工夫・努力・協力していこうとする自覚、社会の特色やよきに対する誇りや愛情をもつことができる。例えば、「なんのために新川をつくり一〇〇年後に閉じたのか」のように、新川の取り組みを通して日本全体でも進められている一般的なことを学ぶことができる。また、未来を生きるための教材開発として「すぐに答えがでない問題」「答えが複数ある問題」「答えのない問題」等の教材化や「グローバル化、情報化、環境悪化、持続可能性、防災・安全」等、社会の変化に伴って提起されている今日的な課題の教材化が必要である。

五 おわりに

会場校となった水川地区の三校を中心に、出雲市の先生方が熱心に研究を重ねて、島根大会の成功に導いていた実感した。全国の神様が集まる「神在月」に、出雲大社のある出雲市での島根大会に参加して、たくさんの学びを得ることができた。

(板橋区立板橋第五小学校)

校長 西谷 秀幸

第三会場

出雲市立中部小学校

一 はじめに

中部小学校は、出雲平野の東部に位置し、豊かな穀倉地帯に広がる地域に位置している。学校周辺には「築地松」をもつ散居集落がある一方、県内の有数の工業拠点の整備も進んでいる。近年は、外国につながる児童が増加したことを受け、日本語指導の拠点校となり、日本文化はもちろんのこと、外国につながる児童の文化も尊重しながら学校生活を送れるよう取り組んでいる。

二 公開授業

研究主題を「ふるさとに学び、今を問い続け、よりよい未来を創る子供の育成」魅力ある教材「問い」をもち、追究していく「社会科の授業づくり」と設定し、研究に取り組んできた。具体的には、次のとおりである。

①「ふるさとに学び」

子供にとってのふるさと、つまり自分のくらしと関わりのある地域の「ひと・もの・こと」と学習内容に関連させることで、「何のために学習するのか」という子供側の動機づけを促す。

②「今を問い続け」

様々な対象に問いをもったり、自分自身がどのように社会と関わっていくとよいかについて思考を巡らせたりする中で、今を問い続ける姿勢は、よりよく生きていくために生涯にわたって求められるものだと考える。

③「よりよい未来を創る」

多様な他者との出会いや多様な考えとの出会いが、自らの思考を広げ、理解を深め、よりよい社会の在り方やその社会への関わり方について考えることにつながる。このような学び方の良さを自覚して取り組める子供を育てていく。

このように研究主題にある文言について学校としての考え方を示し、授業が行われた。参観した第四学年、小単元名「地域に受けつがれているなおえ一式かざり」の授業では、地域の中で三〇〇年間も継承されてきた祭りを取り上げていた。小単元の「調べる・考える」の授業では、「振り返り」を行うことで、次時の授業の問いにつながっていくなど、子供の思考が継続していくよう配慮されていた。

終末の授業では、この祭りの継承のために自分ができること

を考える授業であったが、「継承する町会が減っていく中で自分たちが減っていくことは、そう簡単なことではない」などの子供からのつぶやきが聞かれるなど、継承していく必要性と、継承する困難性に触れるなど、地域の教材を自分事として捉え、考える児童の姿があった。

また、第五学年、小単元名「パソコンをつくる工業」では、地元にある島根富士通を教材として、その工場の世界最軽量のパソコンの製造を取り上げていた。

①「ふるさとに学び」の考えに基づき、地域の教材開発がなされ、子供にとっての身近さが学習を追究する意欲につながっていた。

三 全体会

(二) 基調提案

中部小学校の主な研究内容は、①自分事のできる社会的事象の教材化 ②社会認識を深める単元構成の工夫 ③社会的な態度形成に向かう場の設定について、過去の実践事例を基に提案が行われた。

(三) 指導講評

広島大学 教授 永田忠道先生から講評があった。知識と問

島根大会・課題別提案

I 研究主題とのかかわり

東京都の副主題である「子供が主体的に問いを追究する」

「子供が見方・考え方を働かせる」これらはどの先生方にとっても共通の課題であると思われる。本実践は、「県内の特色ある地域」の三小単元の学習を通して、これらの実現のために行つたものである。多くの課題が残る実践だが、先生方の今後の学習問題・学習計画作りに少しでも役立てば幸いである。

II 研究の視点と実際

研究内容一

「主体的に問いを追究する工夫」

三小単元とも「つかむ」段階の第二時は、学習計画作りのための一時間にした。学習問題への予想を行い、それを確かめるためや学習問題を解決するため「調べること」を理由と共に出し合った。その上で何から調べるかも根拠を明確にして話合った。「大田区の歴史から調べれば、だれが始めたのか、何のために始めたかがわかる。」こ

のような発言によって学習計画が作られていった。自分たちで調べる項目も順序も話し合った計画だからこそ、主体的に追究する姿が見られた。

研究内容二

「社会的事象の見方・考え方が働く学習活動の工夫」

学習指導要領解説には、この単元の視点として地域の位置(自然環境)・人々の活動や産業の歴史的背景・人々の協力関係が例示されている。その中で

も特に歴史的背景に着目するよう授業をデザインした。具体的には、三小単元とも伝統と先進

などの比較から「その活動や産業はなぜ始まったのか」という疑問をもたせ「なぜ」型の学習問題をつくった。それにより子供は三小単元を通して歴史的背景の視点から繰り返し追究し、各地域の特色に迫っていった。

また、上述の通りだが、これらの視点で追究するメリットが学習計画作りにも反映された。

研究内容三

「子供の学びを確かにする評価の工夫」

子供が自らの学びを調整できるよう、「学習計画表」と「振り返りシート」を作成した。

自ら立てた学習計画だが、追究の途中で調べることが変化したり追加されたりした。それらを自由に書き加えられるようにすることでより自覚的に追究することができた。また、大単元で一枚の振り返りシートを使用し、前の小単元での振り返りを指標として現在の小単元での学びを振り返り次に生かす姿が見られた。

III 研究の成果と今後の課題

三小単元で視点と方法を繰り返し使うようデザインしたこと、子供が既習の見方・考え方を働かせて学習計画を立て、それに基づいて主体的に追究していったことは成果と言える。

一方で「なぜ」型の学習問題に揃えようとする中で、子供にとって追究が難しくなったり、他の問いが出にくくなったりした。今後は、「どのように」型を用いつつ、それに対する予想にこれまでの単元で働かせてきた見方・考え方が発揮されるよう、授業をデザインし直す必要があると感じた。

(東大和市立第二小学校 主幹教諭 井上 寛介)

(杉並区立荻窪小学校 校長 手塚 成隆)

鳥根大会巡検

全国大会後の都小社研巡検が五年振りに復活しました。旧暦の十月、出雲地方は「神在月」と呼ばれ、復活した巡検にふさわしい「神々の国出雲」から旅が始まりました。



最初の見学地は出雲大社です。出雲大社案内人の方に迎えられ、雨の中でしたが、「神在月」と呼ばれる理由が、出雲大社にあることを学ぶことができました。出雲大社に日本各地の神々が集まること、そのためにお迎えをするための準備などお話を聞くことができ、雨の中でしたが厳かな気持ちになりました。

出雲大社を後に、日本で四番

目の広さである宍道湖を見ながら、松江城へ向かいました。松江城は、天守が現存されている城であり国宝に指定されています。一行は、国宝松江城を楽しみに向かったのですが、風雨の影響による臨時休業に残念な思いをもち、遠く石垣を背景に記念撮影をしました。

次に、山陰地方の戦いの要所であった月山富田城跡へ行きました。馬蹄形に広がる広大な山城である月山富田城の難攻不落であることを体感するため、きつい勾配を登りました。山城を築いた先人のすごさを思い、庭園で二〇年以上全国一位を獲得している足立美術館へ向かいました。足立美術館では、庭園の素晴らしさと日本画家の繊細な作品を鑑賞し、最後の目的地米子城へ行きました。山頂に五重



の天守閣をもった山陰随一の名城と言われた米子城ですが、建物は失われており、天守跡へ登り中海と米子の街を見ながら、天守が現存していたらの思いを皆がもちました。

五年振りに復活した巡検は、天候にこそ恵まれませんでしたが、社会科学を志す仲間と歴史や文化に触れながら、多くの語らいの時を過ごす素晴らしい時間であり、次の大会の巡検に早くも心は動いています。

(江戸川区立松江小学校 校長 大須賀 慎二)

都小社研
今年度の研究授業及び
研究発表会について

東京都小学校社会科研究会
調査研究部長
府中市立府中第五小学校 草刈 あずさ

研究主題「社会とつながり未来を創る子供の育成」に基づき、各学年及び研究員の部会が、授業実践を通じた研究を進め、研究発表会で成果を発表します。

【三年部会の研究授業】

①六月五日

「大田区の様子」

大田区立入新井第五小学校

馬場 友博 教諭

②六月十四日

「世田谷区の様子」

世田谷区立烏山小学校

長坂 光一郎 主任教諭

③一月十七日

「江東区のうちりかわり」

江東区立豊洲西小学校

岩下 千夏 主任教諭

【四年部会の研究授業】

①七月五日

「水はどこから」

あきる野市立増戸小学校

八木 佳奈 主任教諭

②十月一日

「自然災害(地震)からくらしを守る」

世田谷区立太子堂小学校

鈴木 崇士 教諭

【五年部会の研究授業】

①十月十一日

「これからの食料生産とわたしたち」

大田区立池雪小学校

鎌田 美穂 主任教諭

②十二月十九日

「情報産業とわたしたちのくらし」

江東区立第四砂町小学校

平山 潤 教諭

【六年部会の研究授業】

①十月十五日

「幕府の政治と人々の暮らし」

世田谷区立烏山北小学校

山家 哲雄 主幹教諭

②十一月二十二日

「明治の国づくりを 進めた人々」

江東区立南砂小学校

古屋 暢洋 教諭

【令和六年度研究発表会】

○日時 二月二十一日(金)

午後一時四十分より

○場所 板橋区立上板橋第四小学校

(和田 幹夫 校長)

○内容

授業公開、研究発表・協議

○指導・講師

文部科学省初等中等教育局教科調査官 小倉 勝登 先生

【都小社研研究員研究発表会】

○日時 一月三十一日(金)

午後一時三十五分より

○場所

新宿区立四谷小学校

(石井 正広 校長)

○内容

授業公開、研究発表・協議

○指導・講師

文部科学省初等中等教育局教科調査官 小倉 勝登 先生

夏季研修会を終えて

都小社研事業部長 尾上 健一
大田区立池雪小学校校長

今年度も企業の皆様のご協力をいただき、四つの研修会を実施することができました。定員を超える申込があった研修が多く、都内の先生方の研修意欲の高さを感じました。製紙工場、製紙工場見学では、工場近隣で見学できる場所をご準備いただき、参加した先生方からご好評をいただいています。

今年、製紙工場見学の後には伝統産業展示室ばりっせ、草煎餅丸草一福本店・工場を見学させていただきました。伝統産業展示室では、草加市で皮革産業が盛んになった歴史を教えてください、都内とのつながりに気付くことができました。また煎餅工場では、昔ながらの製法を体験し、想像以上の熱さを感じながら一枚の煎餅を焼く大変さを実感できました。

夏季研修会のよさは、指導者本人が実物を見たり、体験したりした驚きや感動を教材化できることです。子供たちに伝えたいことが必ず見つかる夏季研修会です。来年も多くの先生方のご参加をお待ちしています。

製紙工場見学会に参加して

練馬区立旭町学校教諭 馬谷 若奈

今年、初めて都小社研の夏季研修会に参加させていただきました。同じ職場にいる、何回か過去に参加したことのある先輩にお声がけいただき、研修会のことを知ることができました。一言で製紙工場といっても、

様々な種類があり、今回見学させていただいたレンゴー株式会社では、段ボールの板紙を主に製造しています。動画や展示ブースなどで、会社の取り組みや古紙リサイクルについて教えていただきました。その後、実際に工場に入って製造過程を見学しました。日本一の生産量を誇る工場のため、規模が大きく、完成した板紙の迫力に圧倒されました。工場はとて広く、扱うものも大きいのに対して、自動化・機械化が進んでおり、少ない人数で作業にあたっていることにも驚きました。また、いた

だいたパンフレットで、紙の原料で一番多いのは「木材」ではなく、「古紙」であることも知りませんでした。実際に工場を見学し、働いている方の声を聞くことで、貴重な体験をすることができました。

実際に工場を見学し、働いている方の声を聞くことで、貴重な体験をすることができました。

夏の施設見学会を通して

江東区立越中島小学校校長 大木 直之

今年度の夏季研修会では、JFEスチール株式会社千葉工場での製鉄所見学と切り工房おじまでの江戸切り制作体験をしました。これらの体験を通じて、現代の産業技術と日本の伝統工芸に対する理解を深めることができました。

まず、製鉄所では、製鉄のプロセスを間近に見ることができました。巨大な溶鉱炉とダイナミックな鉄の製造過程に圧倒されながら、環境対策に取り組み姿勢について学びました。特に、リサイクル技術の重要性や資源効率の向上に向けた取組が印象的でした。

次に、切り工房では、江戸切子の制作体験を通じて、伝統工芸の奥深さを実感しました。ガラスを削る作業は非常に繊細で、職人の技術が必要とされることがよく分かりました。参加者は、自分の作品を作ることに熱中し、完成した際の達成感は格別でした。

両方の体験は、今後の学びにつながる貴重な機会となりました。これらの経験を通じて、私たちの社会がどのように成り立っているのか、そして、未来に向けて何が必要かを考える機会を得ることができました。

夏季研修会「ガスの科学館見学」

港区立白糸小学校主幹教諭 大熊美結紀

今年の夏季研修会で、ガスの科学館「がすてなーに」を見学し、暮らしを支えるエネルギー、環境・防災対策への取組について学びました。その屋上からは臨海部を一望でき、ゆりかもめが走る姿も目にし、子どもたちはわくわくすることでしょう。

館内の展示に触れたり、体験したりし、ガスの果たす役割がとて大きいことがよくわかりました。東京ガスでは環境対策に力を入れ、脱炭素社会を目指し、水素と二酸化炭素から都市ガス原料のメタンを合成する研究を進めていることも伺いました。社会科だけでなく、総合的な学習の時間に活用できる教材も豊富です。

災害時を想定して火や水を効果よく使った調理をし、実際にいただきました。子どもたちもできそうです。防災対策を家庭で考えるためのよいきっかけになると思いました。

パラリンピックの競泳男子の全員の木村敬一選手は、東京ガスにお勤めで、東京・パリ五輪二冠のご活躍が感無量でした。二期期始業式に子どもたちに、働きながら練習を積む木村選手の努力について熱く語りました。

酪農体験に参加して

稲城市立第四小学校教諭 白倉 実奈

酪農体験が教育とどのような関りをもつのか学びたい、という思いで研修会に参加しました。

「松下牧場」では、搾乳・ブラッシング・清掃・バター作り等を体験しました。酪農家の方からは、仕事に対する思いや仕事の工夫、努力についてなどを伺いました。様々な体験活動を通して、毎日飲んでいる牛乳が、母牛から生まれているものであることを実感しました。また、母乳を牛乳としていただくだけではなく、食肉として、牛の命をいただいていることに命の尊さや厳しさを学びました。

「あさぎりフードパーク」では、安心して安全な美味しい牛乳を作るために、企業の方が、たくさんの方の工夫や努力をされていることを知りました。

研修会に参加して、朝霧高原での様々な体験活動は、子供たちの価値観を広げる素晴らしい教育活動であると感じました。次回は、子供たちと一緒に訪れて学びを深めたいと思いました。

